

プーケットにおける九皇會は、「地域の祝祭」と「国際的な祝祭」の両様の性格をもつ。いずれの場合においても、この祭りを盛行に導いているのは祭典のもつ多義性である。祭りの目的は、祈願の成就、地域社会の融和、自己の帰属の確認、菜食の享受、物見遊山など、宗教・世俗の両面で人ごとに多岐にわたり、それに応じて意義も様々に分かれる。このような祭りのあり方を可能にした要因として、島の顕著な国際観光地化、および高度情報化やグローバル化の進展に伴う庶民の意識の変化、とりわけ宗教が人々に果たす役割の変化を指摘できる。皮肉ではあるが、現代社会の脱宗教的な風潮・趨勢が、この祭りを類稀な華々しいイベントに仕立て上げていると言うことができる。本報告では、マレーシアの事例と対照しながら、祭礼の参与者へのインタビュー結果なども交え、国際ツーリズムの恩恵に浴するプーケット島の九皇會の特質と意義の変容などについて論述する。

九曜信仰と聖地巡礼

——南インド、タミル・ナードゥ州の事例から——

飯塚 真弓

本発表では、タミルにおける九曜信仰とその聖地巡礼を事例に、巡礼における集団性と個人主義的傾向の対立について、人類学的調査により検討することを目的とする。先行研究より、インドの聖地巡礼には、集団統合的機能（境界維持機能）、既

存のカーースト関係を越えるコミュニケーション的性格、さらに個人的な側面があると想定し、具体的な事例を分析していく。

九曜（ナヴァグラハ）信仰とは、占星術的知識にもとづき神格化された九つの惑星への信仰を指し、惑星同士、星座や星宿との相性が星の障り（グラハ・ドーシャ）として人間の不幸や吉凶を左右する。その特徴は、悪霊や死霊と同列に位置づけられる下位的神格でありながらも、自立した天体の動きとして超越的影響力を持つ両義性にある。それゆえ、天体の運行と個人の時の流れの宥和をはかるため、九曜神そのものへの祈願が必要となる。特に、南インド、タミル・ナードゥ州中部地方では、元来地上での領域性を持たないこれら天空の惑星を特定の場に定位させ、独特の聖地ネットワークが形成されており、惑星と個人の関係性を最適化する手段として九曜神巡礼を位置づけることができる。

本発表では、以上の九曜神寺院をルートに含む、民間の巡礼ツアー「バクティ・ウラー」での参与観察をもとに、九曜信仰にみられる巡礼の集団性の解体について考察していく。ここでの集団とは、第一に宗派、第二に高位カーースト性、第三に集団で行う儀礼的な行為によって認められる集合性を指す。巡礼集団としてのバクティ・ウラーは、参加者が高位カーースト、特にヴィシヌ派のバラモンで占められ、巡礼スタイルとしては排他性が強く、浄性への厳格さが特徴である。さらに、常連の多さや日常生活においても同好会のような組織として宗教活動や市民活動を行い、巡礼の場のみならず、既に組織化されたコミュニティの様相をみせていることである。

しかし、以上のような集団性が九曜信仰の場では否定されている様子が見られた。まず、宗派の超越である。九曜神寺院はシヴァ派寺院であるにも関わらず、ヴィシュヌ派信者も積極的に参拝し、供物の授受などが観察された。次に、高位カースト性のゆらぎである。一般に高位カーストほど神格の高い大神を信仰する傾向にあるが巡礼者たちは神格としては下位に位置づけられた九曜神への参拝を重視していた。また他の巡礼者と共に寺院の前でコーム（米粉の吉祥文様）を描くなど、集団としての排他性も崩れている様子がみられた。さらに、九曜信仰は占星術による個人と星神との関係によって規定される個別選択的な信仰実践であり、儀礼的な行為の集合性はみられなかった。つまり、九曜信仰には、宗派性の侵犯、カーストによる神格および人的交流の排他性の欠如、個人主義的な宗教実践などから、巡礼そのものの反集団的あるいは個人主義的性格が認められる。

一方、四分の三を占めていた女性参加者と九曜神巡礼の関係に着目してみる。高位カーストのジェンダー規範として、女性の逸脱した行為と浄性は集団の名誉に関わるために、基本的に旅行や外出は好ましくないと考えられている。しかし、巡礼における宗教的な探究は信仰深い妻や母としては認される。また、常連の多さ、カースト構成と浄性への厳格な配慮は、参加者のみならず、送り出す側の信頼や安心感にも繋がっている。さらに、九曜信仰の性格は、下位神格故に現世利益的だが、同時に超越的な運命論的性質が特徴である。九曜神巡礼では、巡礼者自身のみならず、家族に影響しうる星の障りを軽減し、健

康や学業の成功など現世的願いを祈願することによって良き妻や母を体現する実践ともなっているのである。